

| | | | | | |
|------------|-------------------------------|------------|------|----------|------|
| 4-3 | | | | | |
| 主題 | 介護職員が現場でどのようにシーティングを行えるようになるか | | | | |
| 副題 | ひのでホームシーティング研究会の今までとこれから | | | | |
| キーワード 1 | シーティング | キーワード 2 | 介護職員 | 研究(実践)期間 | 24ヶ月 |

| | |
|-----------|-----------------------------|
| 法人名・事業所名 | 社福) サンライズ 特別養護老人ホーム ひのでホーム |
| 発表者(職種) | 清水卓(介護副主任)、山内清正(介護職員) |
| 共同研究(実践)者 | 加島守(高齢者生活福祉研究所)、森谷陽一(作業療法士) |

| | | | |
|----|--------------|-----|--------------|
| 電話 | 042-597-2021 | FAX | 042-597-1973 |
|----|--------------|-----|--------------|

| | |
|-------|--|
| 事業所紹介 | ひのでホームは 1972 年に開設した、東京都西多摩郡日の出町にある自然豊かな特別養護老人ホームである。モジュラー型、ティルトリクライニング型車椅子はもちろん介護用リフトなどの福祉機器を積極的に取り入れている。また福祉機器を利用するための研修、勉強会などの育成制度にも取り組んでいる。 |
|-------|--|

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

2003 年に介護職員によるシーティング研究会を発足した。2010 年からはリハビリ職がシーティングを行うことが増えた。徐々に介護職員にも浸透して、シーティング研究会を経験してきた OB が課題発見から解決までの流れを行うようになってきたが、コロナ禍になり勉強会など職員が集まれる機会が減少した。また依然としてリハビリ職が実施することが多く、介護現場ではシーティング実施前の気づき、実施後の再現性が一番の課題になっていた。できていない理由は「観察力の不足」「アウトプット後の介護職員による再現性」が上がっていた。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

本研究ではどうしたらよりシーティング研究会に携わっていない介護職員でも携わることができるかを目的とし、仮説として以下を実施できれば介護職員へのシーティングの浸透が図れると考えた。

仮説 1. 観察力向上：食事時、余暇時、自走時など「何かおかしい」という気づきからシーティング介入が必要と判断された際に提案ができるようになる。

仮説 2. アウトプット能力の向上：シーティング実施後に留意すべきことを周囲にアウトプットすることで再現性を保つ。そうすることで介護現場での気づきがシーティングに繋がり、入居者により良い環境が提供できる。以上が仮説になる。

《3. 具体的な取り組みの内容》

本実践では仮説 1 に対して 2022 年度研究会員にて育成ツールを作成。項目を細かく分けることで研究会員、介護職員が共に身体寸法などの情報を用い、シーティングの目的を設定して実施。その後、外部講師を招いた際に実施したシーティングに対しての相談を行うことで自分たちの答え合わせとなり成功事例になることを実感できるようになると考えた。仮説 2 に対しては仮説 1 でシーティングの目的達成後も変化や他の課題があった際に再アプローチを行い、次の外部講師を招いた際に報告し評価、必要時の再

調整を実施。そして研究会員は毎年年度末に事例発表会を実施。今までの成果を発表することで研究会員が実施したシーティングが良い結果に結びついていることを確認できる。研究会員だけではなく介護職員からの発信が発表に結びついたことで達成感を感じることができるようになると考えた。

《4. 取り組みの結果》

仮説 1 に対しては育成ツールを用いて情報収集と目標設定を行った。介護職員と研究会員または OB が車椅子調整を共に行い、課題としていた介護職員の「観察力」が向上し研究会員への問題提起も増加した。仮説 2 に対しては研究会員も入れ替わりを行いアウトプットができる介護職員は増加した。目的としていたシーティングの浸透については、願いごとの取り組みに繋がった。2022 年度から家族と叶える願いごとの取り組みを法人として積極的に取り組んでいる。介護職員が研究会員に車椅子の調整や変更が必要な事例を相談し、車椅子の調整だけではなく自宅の環境なども確認し外泊や一時帰宅の願いを叶えることができるようになった。外泊などで家族と共に叶えた願いごとでシーティング研究会が関与した件数は 2022 年度が 6 件、2023 年度も 6 件であった。そのうち研究会員以外の介護職員から声が上がって実現した件数は 2022 年度 1 件から、2023 年度は 4 件と増加した。シーティングを実施すれば願いを叶えられる、相談すれば可能性があると感じられるようになったと判断できる。リハビリ職が携わることも継続しており、看護職、相談員と連携の幅を広げて専門職からの気付きからの相談や家族からの情報共有によるシーティング実施などより実現に近づき、少しずつ浸透してきていると考えられる。

《5. 考察、まとめ》

課題がどこにあるか理解し育成ツールを実践したことで気付きからの相談が増えたと考えられる。アウトプットは今後も研究会員の育成を中心に実施していくことが必要である。さらに本実践により介護職員のシーティングへの関心は年々高まり、願いごとなどの取り組みに現れたと考えられる。施設内の各部署の関心も今まで以上に高まることにより、外部への発信など様々な動きに繋げることができるようになった。意識改革を行ったことで本研究内容以外にもプラスアルファの結果が出ていた。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

2021 年度 厚生労働省 老人保健健康増進等事業 高齢者の適切なケアとシーティングに関する手引き 追補版 12-30 頁

2022 年度 株式会社 日本総合研究所 令和 3 年度 老人保健事業推進費補助金 老人保健健康推進等事業 介護現場における適切なシーティングの実施に係る事例及び研修に関する調査研究事業

2019 年 佐々木八千代 白井もどり 一般社団法人 日本老年看護学会 老年看護学 介護保険施設におけるシーティングに対する職員の認識 47-52 頁

2023 年 種橋 征子 高齢者介護施設における理念浸透の実態 ―一般介護職員の理念浸透の構造と離職意向との関係―

《8. 提案と発信》

現在、地域の産業祭や小中学校への共生社会の勉強会など外部のイベントに参加することでひのでホームの取り組みを周知し、入所を希望されている方への情報発信、将来の高齢化への対応に繋げることがより今後、大切になってくると思われる。サンライズの理念である「安心と充実の人生をご一緒に。」の「ご一緒に。」を入居者、職員だけではなくご家族と共にすることが大切と思われる。